Osaka University Knowledge Archive

Title	ウガンダの刃物とその形態について
Author(s)	森, 淳
Citation	デザイン理論. 1973, 12, p. 26-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53648
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ウガンダの刃物とその形態について

森　　淳

はじめに

ウガンダの三年にわたる生活は、広い意味で私の興味を満してくれた生活でもあった。私が滞在した1968年から1971年と云う年は、ウガンダ共和国が1962年に独立して以来、もっとも安定していた一時期であったように思われる。独立以来大統領であったムテサが、1966年に前大統領オボテによって英国に追放され、オボテ大統領のイニシアチブの下に新興の気運も豊かなウガンダナイゼイションが始められて国情も安定し、新しい計画に従って工業化も次第に進められて来ている時期であった。しかしその反面、地方には従来からの原住民達の生活がほとんど変らない状態で残されていて、かねてより縄文式土器の機能と形態に関する考察を行っていたこともあって、特に原始的な土器の調査は、推測の域を出なかった縄文式土器の使用についてを、更に類推を深めることができたように思うし、また土器についての概念が更に拡げられた感じも受けた。これら土器についての報告は、日本美術工芸、1971年８月号、また大阪芸術大学紀要〈２〉1973年に於て発表し、『アフリカ研究』第13号でも発表される予定になっている。

土器の調査と並行して刃物の調査も少し行った。彼等にとっては土器同様、主要な生活用具であり、また形態上も刃物デザインの原形をかなり留めている

ように見受けられた。かって北欧からドイツを訪れた時、私が非常に興味をもって見たのは機能的な美しい形態をした刃物類であった。

ここでは、アフリカ原住民（東アフリカ、ウガンダ共和国の各部族）の刃物とその形態、そしてさらに北欧やドイツで見た近代的な刃物の形態などについて考えてみたいと思う。

もとより私は、金属工芸を専攻したものではない。従って金属工芸的な見地からそれらのことについて述べようというのではなく、一般的な工芸としての立場に立って調査したアフリカの刃物の報告を兼ねて、考察をすすめてみようとしているのである。

ウガンダの刃物類について

生活用具としての刃物の形態は、食物と密接に関連して発達して来ているものと考えられる。東洋で発達して来た菜刀、また日本の刺身庖丁などは、ヨーロッパで発達して来た食肉用の庖丁とは形態上かなり大きな相異をもつものである。

一般に食器や割烹具などのフオルムは、食生活と密接なつながりをもち、食餌のひろがりや、その状態にともなって、それの用に適うための発達があったものと思われるが、刃物類もまた合理的な要素を含みながら、機能に忠実な形態へと変化をとげて来ているものと思われる、従って菜食、魚食を中心とする東洋の調理用刃物と、肉食を中心とする西洋の調理用刃物とでは、根本的にその機能するところが異るため、その形態もまた自ら異った方向に発達してきたものと思われる。

この傾向は単に調理用刃物に限ったことではない、武器として用いられる刃物類についても同じことが当てはまるのではないか、つまり西洋の刀と、日本の刀を比較した場合そこに典型的な例が見出されるのではないかと思うのであ

る。

ウガンダの７種族、40に近い部族の刃物を観察しても、同じようなことが云えるであろう。この国の刃物の場合は大別すると、プランテン・バナナを主食とする部族と、ミレットを主食とする部族とに分けて考えることができる。また種族としては、バンツー系の種族と、ナイロティック系の種族に分類できるかるしれない。

ブガンダでエキソ（ekiso)〈写真１〉と呼ばれるプランテンバナナ用のナイフは、主としてバンツー系部族に於て使用され、ナイロテイック系の部族ではほとんど使用されていない、もっともナイロティック系部族の中でも

〈写真１〉

キヨーガ湖周辺に居住するジョパドラ、エルゴン山に居住するセベイなどプランテンバナナを主食とするバンツー系部族と密接な関係にある部族のように、プランテンバナナを食べる風習をとり入れて、ミレットと共にそれを主食としプランテンナイフと非常に類似したナイフを使用している部族もみられる。

ナイロテイック系の部族のあるものは、ミレットの収穫の時、ミレットの穂を刈取るための小形のナイフで、一般に女性用ナイフと呼ばれるものを持つ部族もあるが、総じて同系統の部族は同じような形態の刃物を使用しているよう

に観察された。

一般にウガンダで使用されている刃物の材質は、0.8－1mm厚の鉄板を鍛造して作られているものが多い。

狩猟用または武器としての刃物は槍で代表されるが、その他に小さなナイフ類が多く使われる。好戦的な部族として知られているウガンダ北部に居住するアチヨリには、45－50cmの刃わたりの刀があると云われているが、観察することはできなかった。しかしこのような長い刃わたりの刀をもつのはアチヨリだけで、他の部族では使われていない。

珍らしい武器としては、ウガンダ北東部に居住するカラモジョンに腕に装着して使う円形の刃物がある〈写真２〉。

〈写真２〉

1968年３月ウガンダ工科大学に赴任した頃は、すでに都会またはその周辺で槍を持ち歩く姿を見掛けることはなくなっていたが、同年５月カラモジャを初めて訪れた時、ほとんどのカラモジョンの男性が２本の槍を持って歩いているのを観察した。しかしそれも1969年に武器の携帯がかたく禁じられてより、ウガンダ国内で槍を持ち歩くものは見られなくなった。

ウガンダ滞在中、刃物類の収集を試みたが刃わたり15cm以上の刃物、または武器類の日本国内への持込みが禁止されていると云うことから、小形のものの

みになってしまい、美しい形をした槍など収集しなかったことが悔まれてならない。せめて写真にでもしておけばよかったと、今にして思うのである。

ウガンダの刃物の種類

ウガンダ国内で作られ、使われている刃物の種類とその形態を大別すると次のようになる。

1. プランテンバナナ用ナイフ。
2. 肉用ナイフ。（屠殺用ナイフ）
3. 農業用ナイフ。（収穫用ナイフ）
4. 特殊ナイフ。（武器を含む）

(1) プランテンバナナ用ナイフ。（ekiso)(写真１）

この手のナイフは主としてプランテンバナナを主食とするバンツー系部族に於て使用されているもので、同系部族では共通の形態をもってはいるが、先端のカーヴが多少部族によって異っているように見受けられる。湖岸地方バンツー族の主体をなすガンダ族のものよりも、キヨーガ盆地グループバンツー族のものの方が大きくカーヴして、一見華麗な形態をもつものが多く使用されている。しかし一般に刃わたり15－18cm、幅２－３cm、平板の鉄板で作られ、長さ18－25cmの木の柄に取付けられている。

これの小形のものはプランテンバナナの皮剝きに使用され、また大形のものはプランテンバナナの収穫の時に使用するもののようであった。プランテンバナナの収穫は、先づパンガと呼ばれる長鉈（この長鉈（パンガ）は伝統的なものではなく、植民地化と共に外国から持ち込まれたものと云われており、広く旧英領アフリカで使用されている。ウガンダで使用されているパンガはオーストラリア製のものがほとんどであった）でバナナの幹を切り倒して収穫を行う。

プランテテンナイフを使用する部族としては、

● 湖岸地方バンツー族

Tusi, Hutu, Kiga, Hima, Iru, Nyoro, Toro, Ganda.

● キヨーガ盆地グループバンツー族

Soga, Gwere, Nyuli, Samia, Gwe, Gisu.

● ナイロテイック族

Jopadhla.

● ナイロ・ハミテス族

Sebei.

(2) 肉用ナイフ

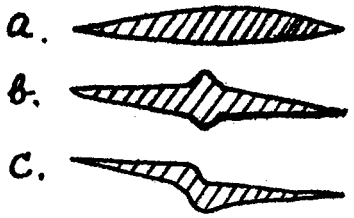
この手のナイフを一応肉用ナイフとして分類したが、肉用のみに使用されるのではなく広い用途で使用されているが、ここではプランテンバナナ用ナイフと区別するために分類してみたもので、一般に牛飼いの部族に於て使用されているナイフ類を指している。

形態は柳葉状のもので、大小各種が作られているが、刃の断面には三種類のものが観察される。

a. 平状

b. うね状

c. 段状



肉用ナイフ断面図

平状のものは、主として湖岸地方バンツー族のものに見られる形態で、一般にエキタラ（ekitala）と呼ばれる小形のものが多く〈写真3〉，刃わたり6－8cm、幅1.5－2cmのもので、長さ8cmの木の柄に取付けられている。またキヨーガ盆地グループバンツー族では、これと同じ形態のもので木製の鞘をもち、柄の上部と下部に刻み目文様を施したものを狩猟用ナイフとして男性のみに使用されている。

うね状のものは、湖岸地方バンツー族を除く他の部族に於て一般に見られる形態で、平状のものよりやや大形に作られ、一般に刃わたり12－15cm、幅3cm、長さ12cmの木の柄がついている。またこの手のものは両刃に作られているのが普通である。

段状のものは、西部ウガンダで見られる形態であるように思われる。大きさはほぼ平状のものと同様であるように観察した。

いまこれら肉用ナイフ使用部族をまとめてみると、

a. 平状ナイフ

湖岸地方バンツー族

Hima, Iru, Toro, Nyoro.

ナイロハミテス族

Teso.

b. うね状ナイフ

キヨーガ盆地グループバンツー族

Gwe, Nyuli, Samia, Gisu.

ナイロ・ハミテス族

Sebei, Teso, Karamoja.

ナイロテイック族

Acholi, Alur, Lango, Jopadhla.

c. 段状ナイフ

湖岸地方バンツー族

Kiga, Hutu, Tusi.

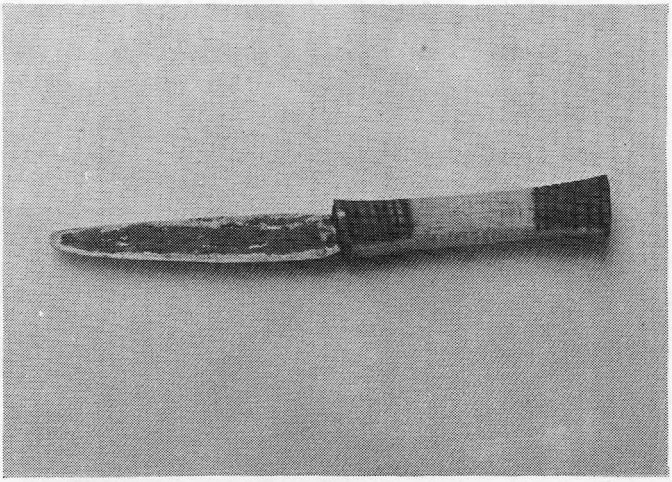
マディ・ルグバラ・グループ族

Madi, Lugbara.

(3) 農業用（収穫用）ナイフ

特別に収穫用のナイフとして作られるものは少なく、北西ウガンダのアルア

族の女性が使用するものに小形の鎌形のもの（写真４）がある他は、肉用として分類した形態のものの小形のものがその目的のために使用されている。



〈写真３〉

〈写真４〉

ここで云う収穫とは、ミレットのような殻類の収穫を指し、ウガンダではこの種の小形ナイフを使って穂をつみ取るのである。そのために形態は小形のも

のが多く、また片刃に作られている。

(4) 特殊ナイフ

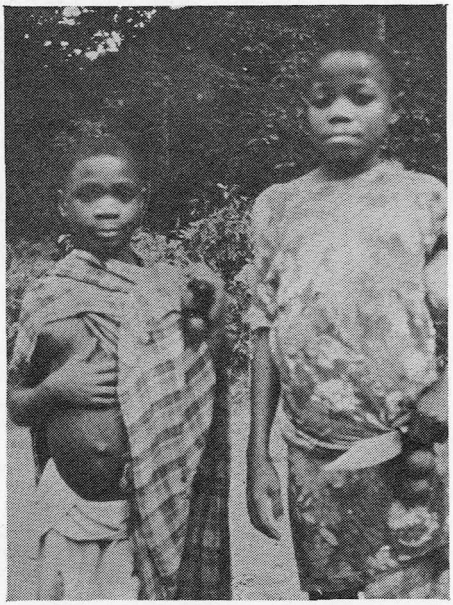
特殊なナイフと云うより、部族独自のナイフと考えた方が妥当かも知れないが、その中には特殊な場合にのみ使用されるものもあるためにあえて特殊なナイフとして分類してみた。

a. アンバ・ピグミーの女性用ナイフ

写真〈5〉のピグミーの女性が持っているのがそれで、収穫、採集などに使用するほか日用の道具としての役割をもつナイフである。

アンバでは女性が腰帯にはさんで持ち歩くと云われている。形態は幅広く先細で、12－13cmの刃わたりのものが普通である。

ピグミーはアンバ族と隣りあった部族であり、互に交流があるためアンバ族から入手しているものと思われる。この写真はルウエンゾリ山の西方、ザイル共和国との国境附近のイトゥリの森で写したものである。



〈写真5〉

b. アルア族の女性用ナイフ

前述の収穫用の小形鎌状のもので、この手のものはアルア族の女性のみが使用する（写真4）。

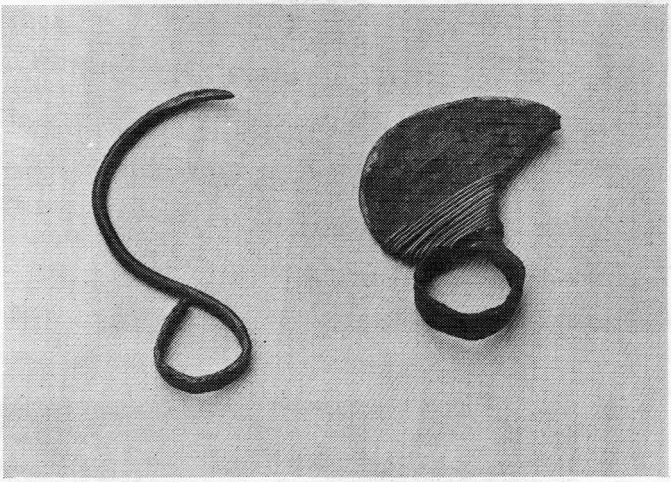
c. 腕輪状ナイフ

アグル（agul）またはアバリア（abaria）と呼ばれるナイフで、カラモジョンの男性が武器として右腕に装着して使用するものである（写真2）。 形態は

12－13cmほどの円形で、一部分が腕を通せるほどの切れ目になって開き、中央部が直経6cmの円形の穴になっており、穴の周囲を牛の生皮で被って着用時に腕を保護するようになっている。また使用しない時は牛の生皮で刃の部分を被って、刃を保護するとともに危険防止の役割をさせている。

d. 指ナイフ

エグウオル（egwolu）と呼ばれるナイフ（写真6）で、これもまたカラモジョンの男性が武器として指にはめて使用する。形態は刃わたり12cmの半円形、



〈写真6〉

幅は広い所で4cm、下に直経3cmの指輪状の部分があり、右手の中指に刃を外側にむけてはめ、握り拳をつくってかたく握って使用する。

また指にはめる武器としては、このナイフの他に指フック（写真6）があり、これも指ナイフ同様の使用をする。

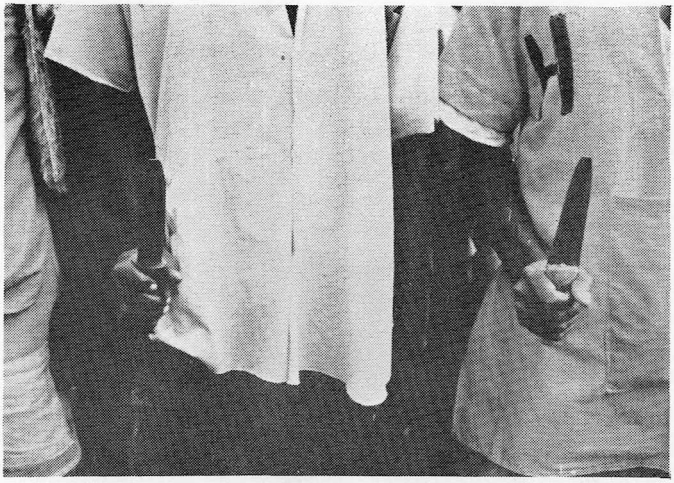
e. 割礼用ナイフ

ウガンダではキョーガ盆地グループバンツー族のギス族が唯一の割礼を施す部族である。割礼は成人式でもあり、2年目毎に神聖な儀礼として行われる。

1970年8月3日ブギスのエルゴン山附近、ブゴベロ(Bugobero)で行われた

割礼の儀式に、外国人として初めて招待されて観察することが出来た。

割礼で使用されるナイフは、研ぎすまされた刃わたり15cm、幅３cmの両刃のナイフで、切っ先はわづかに切落したような形態で、10cmの木の柄がついていた（写真７・８）。割礼はこのナイフで包皮を上から下へ半分切り、つづいて下

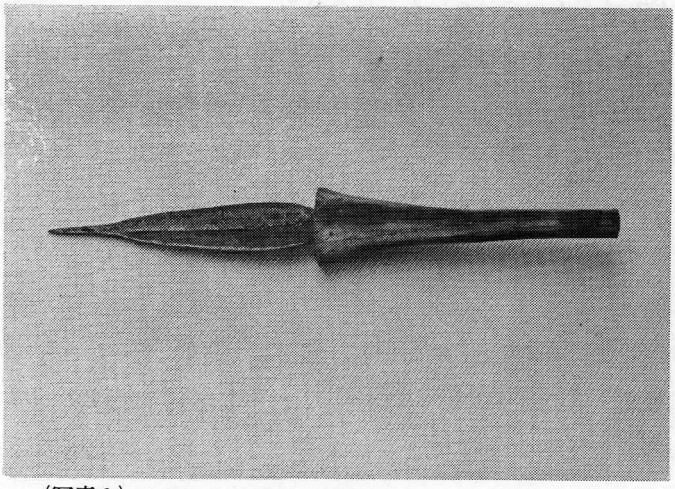


〈写真７〉

〈写真８〉

下から上へ残った半分の包皮を切り落す。

この他に小形の割礼用ナイフ（写真９）もありこれは柳葉状のもので、尖端が鋭く尖った刃わたり６㎝、幅２㎝、９㎝の木の柄がついたもので、段状の断面をもつ刃がついている。



〈写真９〉

刃物のデザインについて

刃物類のみならず土器類などに於ても見られることだが、アフリカのそのような道具類は未だ視覚的な美意識にもとずいたデザインの段階には至っておらず、未だに素朴な状態のままにおかれていると考えても良いのではないか、道具類は単にその機能を果すこと、用に適うことのみを目的として作られている、つまり刃物の場合は〝切る〟機能が果されることが目的であって、視覚的な美だとか、それに供う心理的な切れ味だとかシャープさなどが要求される段階には至っていないのである。

これらのことから考えてみると、アフリカ原住民の刃物の形態には、未だに刃物デザインの原点を残していると考えても良いのではないだろうか。そこで

ここでは先進国といわれている国々の刃物と、アフリカ原住民の刃物とを対比させて考察をすすめてみたいと思う。

槍はいまだアフリカ人達の儀礼時に於て重要な役割りをもち、槍本来の機能とともにナイフとしての機能をも果しているところをみると、アフリカの刃物の起源は槍にあったのではないかと思われる。

『テソ民族誌』（長島信弘著、中公新書）にウガンダ北東部の部族イテソに於る儀礼を詳細に述べている中に、犠牲の山羊を屠る場面で、『胸から腹の正中線を槍の穂先で切り開き、右腹の皮をはいで腹腔を露出させ、胃や腸を用意してあった小枝の上にひき出した』(p.70) また他の儀礼で犠牲牛を屠る場面では『分配がすむと、めいめい自分の取り分を槍やナイフで切りとり、焚火であぶり、円陣にもち帰って食べる』(p.84) と報告されている。これをみてもアフリカでの槍の使用法は唯単に刺す機能を果すことばかりではなく、ナイフとしての切る機能も果す広い意味での刃物としての用に適う機能を果しているものと思われる。そのために槍の穂先は幅広でナイフのような形態をしたものが一般的なのであろう。写真〈10〉はピグミーのものであるが、ナイフと同様の形態をし、通常の狩には小形の槍を用い、大形の動物に対する狩には大形の槍を使用する。

これらのことから観察を更に広げて行くと、肉用または狩猟用のナイフと称されるものの形態は、槍の穂先と甚だ類似しているのに気がつく。特に大形のこの種のナイフは、長い槍の柄のかわりに短い柄にすげられているのにすぎないのを認めることができる。

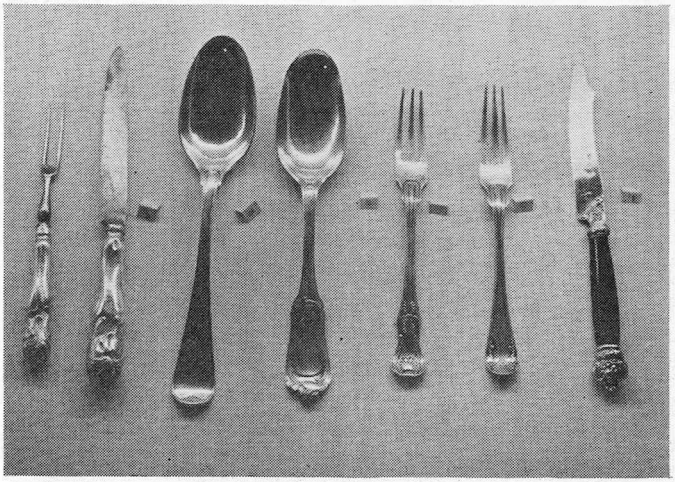
写真〈11〉はロンドンのヴイクトリア・アルバート・ミュウジアムに陳列されている近世の肉用ナイフである。左のナイフの刃の形態はアフリカの肉用ナイフ（写真３）と甚だ類似している。右のナイフも肉用のものだが、峰の部分に突起を作って刃の部分に変化をもたせてある。いづれのナイフも機能にまことに忠実に作られている。しかし工業化が進み規格化が進むに従って先の丸い

まっすぐな刀身になって行き、機能的な効率の差が生じて来るのである。だがこの差が、今日に至って、とりわけドイツで認識されるようになり、多種多様の機能に適合した変化のある標準的なタイプを生み出した。

（ハーバート・リード著、インダストリアル・デザイン p.93）

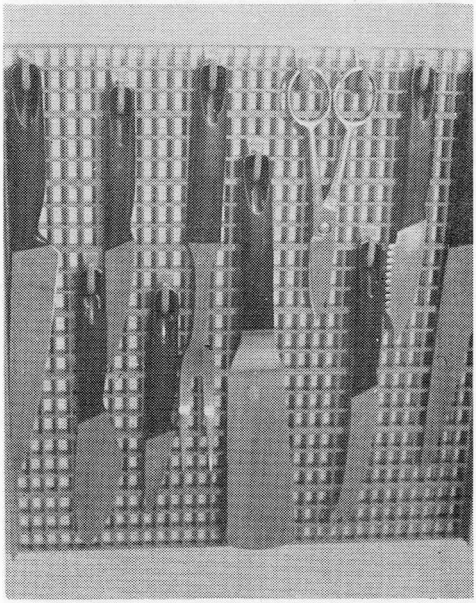
ハーバート・リードのこの説を裏付けるような刃物の一群をドイツで見ることが出来た。写真〈12〉がそれで、これらの刃物は同じデザインポリシーのもとに作られたもので『多種多様

〈写真10〉



〈写真11〉

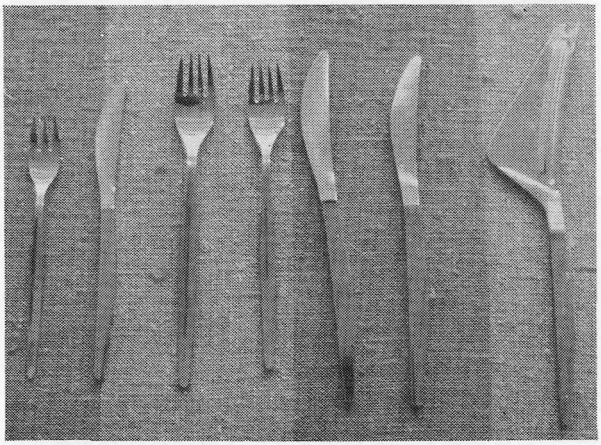
の機能に適合した形』にデザインされて、如何にもドイツ的である。しかしここでも肉用のナイフは柳葉形が基本の形態になっている。どのように規格化されて行こうと、結局この基本の形態から出ることは出来ないのであろうか。



〈写真12〉

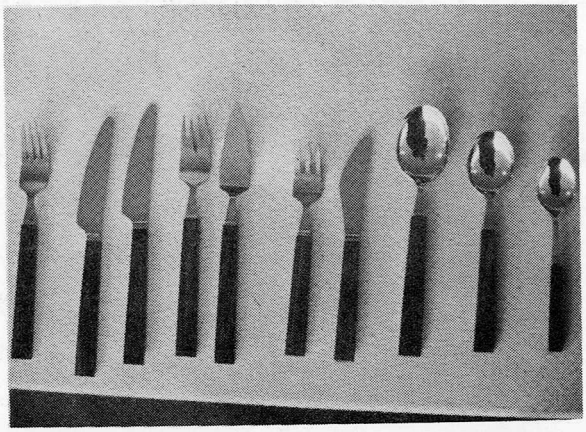
写真〈13・14〉は、デンマークで見たもので同じく肉用のナイフ・フォークである。一組は金属のみのデザインであり、もう一組は金属と木材とを組合せたものではあるが、刀身のデザインはほとんど変化をみとめない。だが同じように刃物のデザインでも、写真〈15〉のジャガイモの皮剝きナイフのように、全く機能から引き出された美しい形態をもったナイフも出現して来ている。規格化されてゆく刃物のデザインの中で、このナイフのように機能の原点に立ち帰り、その中から形態を引き出そうとする傾向も出て来ているのであろう。

〈写真13〉

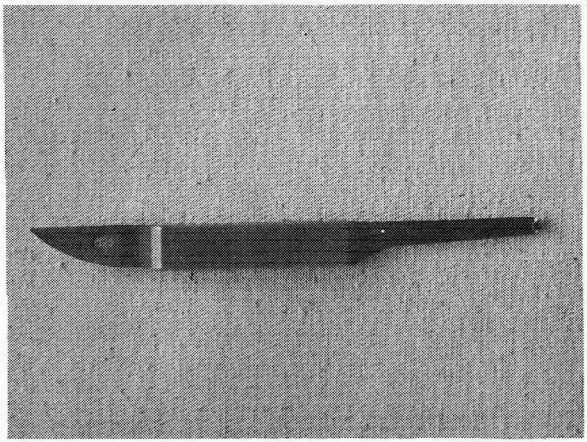


それにしても、アフリカ原住民の刃物と云い、先進

国といわれている国々の刃物と云い、造形技法、またはデザイン感覚に巧拙は認められるにしても、同様な基本形態をもっているところをみると、刃物のデザインはその発端に於てすでに一定の基本的な形態が確立し、その延長線上でデザイン活動が行われているのにすぎないのではないかと思われる。



〈写真14〉



〈写真15〉

おわりに

3年ばかりアフリカ人の中で生活してみて深く感じたことは、彼等の生活のみならず使用している道具類の簡素さと、そして彼等の素朴な考え方であった。文明の汚濁に染らず自然に密着した中での生活が、彼等に簡素なものの使い易さを教えたり、素朴な考え方をさせたりしているのかも知れないと思うようになった。

早稲田大学の探険隊がゴムボートでナイルの河下りを計画してウガンダに来

て滞在し、その帰りに私は日本製の肉庖丁をもらって使っていたが、私の所のハウスメイドは一向に喜ぶ様子はなく、切れすぎて楽しくないと云うのであった。彼女にとって庖丁は切れすぎてはならないのである。またウガンダ東部に居住しているブニョレ族にたのまれて、彼等の部落に土器用のアンコウ窯を築窯し、同時に蹴ロクロを工作して土器の生産を上げようと試みたことがある。三ケ月ばかりして再び訪れてみると、彼等は便利の良いそれらの道具を使わずに、従来の手造り野焼きのアフリカ古来の技法で製作をしていた。何故かと云う私の問いに彼等は一言、出来すぎるのだと答えるのであった。

彼等にとって刃物は切れなければならないが、切れすぎてはならないし、土器の製作も出来すぎてはならないのである。またウガンダの学生達にとって新しくデザインするという行為は、仲々理解が出来ないのであった。彼等の形態に対する思考は、与えられている概念規定の中を往来するばかりで、規定された概念から出ることにかなり強い抵抗を示すことが多かった。

そして彼等は、切る楽しみや作る楽しみまで放棄してまで大量に生産することは彼等の思考の中では思いも及ばぬことらしいのである。

私はそのとき『作る者と使う者とにとって共にそれが楽しみでなければならぬ』と云ったウィリアム・モリスの言葉を思い出していた。文明社会は案外そんな素朴な楽しみを忘れさせてしまっているのではないかと思えて来るのであった。

土器の調査も、刃物の調査もそんなアフリカ生活の中で私自身デザインの原点のようなものに触れてみたいと思って始めたことであった。今にして思えばもっと貧欲な目で調査すべきであったが、日が過つにつれてアフリカナイズされて行き、そんな貧欲さを失ってしまうのであった。この調査はそうした中でひろいあつめたものである。

参考文献

長島信弘. 1972. 『テソ民族誌』中公新書

ハーバート・リード. 1957. 『インダストリアル・デザイン』みすず書房

J. ROSCOE. 1965. 『The Baganda』 Frank Cass& CO. Ltd.

M. Troweil & K. P. Wacksmann. 1953. 『Tribal Crafts of Uganda』 Oxford University Press.

A. M. Lugira . 1955. 『Ganda Art』 Osasa Publication, Kampala.